

# 伝統芸能と映像メディアを接合する創造的実践の民族誌的研究

## —中国雲南省徳宏タイ社会の事例—

雲南少数民族伝統芸能研究グループ 代表 伊藤 悟 (国立民族学博物館 外来研究員)

張 興榮 (雲南芸術学院音楽学院 教授)、晚 相牙 (徳宏人民ラジオ・テレビ局)

### 要約

グローバルな規模で進むメディアの普及と発展が、ローカル社会で思いがけない創造性と結びつき、独特なメディアの利用形態を生み出している。本研究では、中国雲南省における徳宏タイ族の伝統芸能と映像メディアの現代的関係に注目し、人々がいかにメディアを用いながら伝統芸能を改変し、かつ担い手の活動の余地を社会に切り開こうとしているか、民族音楽学と社会人類学、そして芸能の担い手による共同チームを編成して調査をおこなう。

### 目 的

メディアの多様化現象はグローバル化が急速に進む現代社会において、「文化」が画一化に向かうどころか逆にローカル地域の「文化」を活性化し、国境を越えた「文化」交通を引き起こす側面がある [1]。本研究は、中国雲南省の少数民族タイ族社会における伝統芸能と映像メディアの接合のあり方と普及状況に注目し、人々がいかにメディアを用いながら再帰的な実践のなかで芸能を改変し、その活動の余地を社会のなかに切り開こうとしているのか調査にもとづき民族誌的研究をおこなうことを目的とした。本報告では、調査によって得られた具体的成果を中心に提示し、今後の研究の可能性を述べたい。

### 調査地の現状

中国ではテレビ番組を VTR に録画して鑑賞するという習慣は育たなかったが、1993 年頃に VCD 再生機が販売され、その数年後に一般家庭へ普及がはじまると豊富なコンテンツを安価に鑑賞することができる海賊版 VCD が爆発的に流行するようになった [2]。違法メディアの全国規模の流通は、映像メディアの普及を促し、新しい娯楽のあり方を確立したが、他方で著作権問題や海外企業の経済損失といった国際問題を引き起こした。近年では、映像制作の大衆化が進み、低廉のビデオカメラと PC が普及するとともに、個人で映像作品がつくられるようになった。一般家庭への影響としては、結婚式のような記念行事の記録が流行し、プライベート作品が当たり前のように制作されるようになっていった。記念映像の制作は瞬く間に大衆化し、農村部にまで広がっていった。

このような映像メディアの撮影と制作は、やがてローカル地域に波及し、多様なあり方を見せるようになった。そこで、本研究は、中国雲南省西部の徳宏州のタイ族地域を主な調査地として、そこでの伝統芸能と映像メディアの接合について調査と考察をおこなった。

映像と接合する主な伝統芸能ジャンルは、即興の掛け合い歌である。徳宏州のタイ族は、問答のように即興的に歌を紡いでコミュニケーションする「掛け歌」（歌垣）文化を有している。かつては誰もが生活のなかで身につける基本的技術であったが、文化大革命において 10 年間伝統芸能の実践は禁止された。その後、復興運動が活発となったが、断絶の溝は深く、また急速な社会変化のため伝承は危機に直面した。しかし、晩相牙をはじめ多くの民間歌手や知識人が変化に対処すべく様々な実践を試みた。特に注目すべきは、これまで伝統的には社会的地域が認められることはなかった職能的歌手が 1998 年頃より登場し、基本技術としての即興歌が緩やかに廃れる一方で、職能者の詩的技術は目覚ましい洗練を遂げた。

職能者たちは 2002 年頃から経済的戦略として映像メディアに自分たちの歌を記録し、販売することで知名度を高めようと試みた。それが功を奏し、村落では自主制作メディアが爆発的に流行した。村人たちは、宗教儀礼や文化活動を開催する際には職能者を招いてパフォーマンスを記録したり、自分たちの歌や踊りの活動を映像で記録するようになった [3]。編集された自主制作メディアが、複製されローカル市場に拡散することで、国内外のタイ族の人々の日常的実践に新しい風が吹き込み、伝統文化の革新と再生産を引き起こしている。

### 方 法

このような現状を踏まえ、本研究ではまず広い視野から雲南省全域の少数民族地域における映像メディアのロ

一カル化現象を把握することにした。これによって地域的な差異がいかなるものか、そしてそれは何に起因するのかを分析し、徳宏州タイ族地域の現状を相対化しようと試みた。広域調査は、長年少数民族音楽の調査研究に携わってきた雲南芸術学院の張興榮教授が担当し、学生に調査希望者を募ってフィールドワークを実施した。これにより、昆明市周辺を張興榮教授がおこない、他地域は張教授の指導の下、楚雄州（担当：楊丹霞）、紅河州（担当：曾冬林）、普洱市、玉溪市など（担当：曾慶圓）、麗江市、臨滄市、大理市など（担当：楊金山）にて調査した。また、自身も映像制作者である雲南省社会科学院の和淵は、昭通市や大理市、麗江市にて調査をおこなった。

徳宏州タイ族地域では、民間職能歌手として象牙民間芸術団を率いて即興歌の上演活動をおこなっている晩相牙（女性、徳宏人民ラジオ・テレビ局退職・団長）と、著名な歌手の金莫算（男性、農民・副団長）が、この10数年間に芸術団に関連した映像メディアや、掛け合い歌の洗練に寄与したタイ文字資料の収集をおこなった。

ミクロな社会人類学的研究は、徳宏地域にて伝統芸能に関する長期調査を積み重ねてきたチーム代表者の伊藤悟が担当した。第1回の渡航では、各チームが収集した映像メディアに関し、共通理解を得るための議論をおこなった。第2回の渡航は1か月におよび、晩相牙が率いる民間芸術団のパフォーマンス活動に同行し、映像メディアの撮影や制作の近年的傾向を調査した。特に、春節前後に農村部各地でおこなわれる仏教儀礼と、その機会に歌われ、撮影される即興歌の掛け合いを中心に調査した。調査後半、和淵が徳宏州に合流し、農村の老人たちがノスタルジーを感じる生活音について調査し、録音と映像記録を蓄積した。これは、変容する掛け合い歌を支える美的感性を、音文化という広い文脈に位置づけ、改めて変わりゆく生活音に対する感性と、即興歌をめぐる感性の関係性を探るための民族誌的データの収集であった。

## 結 果

広域調査の成果を総合してみると、雲南省各地の少数民族地域における映像メディアの受容と創意工夫のあり方には、地域や民族によって共通点と相違点が浮かび上がった。まず、伝統芸能の担い手は、どこも40代以上の中年や老年が中心であった。使用される媒体は、ビルマやベトナム、ラオス国境周辺の、徳宏州を含む地域（タイ族やジンポー族など）では、VCD、DVDメディアが主流であった。一方、国境から離れた比較的内地の少数民族地域（イ族やナシ族、ペー族、チベット族、ミャオ族、リス族など）では、映像メディアに加え、数年前から「小蜜蜂」と呼ばれるMP3再生・録音機が愛用されており、歌や音楽がデータでやり取りされていた。「小蜜蜂」は大音量のスピーカーが搭載されており、伝統舞踊の豊富な民族は、夕方から夜に娯楽で音楽を再生しながら踊るを楽しんでいた。機器の操作性は簡単で、携帯性にも優れており、老人が散歩しながら聴いたり、自分の歌や音楽を録音して友人と交換したりするなど使用方法が見られた。徳宏州では、未だに携帯MP3再生機は流行しておらず、その原因を推測するに、伝統舞踊が少ないという理由があげられる。

今回の研究では、すべての少数民族地域を網羅したわけではないが、合計で約180作品の映像メディアを収集した。興味深いことに、徳宏州タイ族地域と同様に、映像メディアのローカル市場での流行を通して村ののど自慢や舞踏熟練者が有名になり、職能者として活動する現象が共通してみられた。職能化のプロセスは徳宏州に限っても、特殊な社会的契機や段階、カリスマを持った人物など複雑な社会関係性のなかから登場するため、今後さらに個別の歌手のライフヒストリーなど聴き取り調査を積み重ね、異なる地域社会がいかにマクロレベルで連動していたのか、また地域政府の無形文化遺産保護活動が具体的にどのような影響をもたらしたのかを明らかにできる可能性がある。

徳宏州にて、1998年頃から民間歌手の職能化に取り組んできた晩相牙の民間芸術団に関連する映像作品は、2001年から芸術団が制作・販売したVCD・DVDは10作品、そのほかパフォーマンスをおこなった村落の依頼で撮影・編集された記念映像が、今年度入手できたものだけで、30作品以上あった。実際は、依頼者側で依頼した撮影業者が制作した記念映像も多くあり、その数は計り知れない。

報告者の2回目の調査渡航中、晩相牙が率いる民間芸術団に対し、隣接する保山地域にある2か所のタイ族地域から即興歌の上演依頼があった。この依頼に対して、我々の提案で、記念映像作品『施甸傣歌』（施甸地域のタイ族の歌）と『湾甸傣歌』（湾甸地域のタイ族の歌）の撮影と自主編集の話を持ちかけた。この試みでは、映像メディア制作に際して、現地の要望と職能者の提案がいかなるものか、撮影と編集の嗜好性を知る手掛かりとなった。現地の人々は著名な芸術団の訪問記念のために職能者の歌を中心とする構成を要望したが、職能者は現地の人々の歌の演目などを多く取り入れることを提案した。その理由は、民間芸術団の歌はすでに多くの作品が流通していること、現地の伝統文化への誇りを残してもらいたいこと、そして、民間芸術団と現地人との掛け合い歌がそれほどもりあがらなかったこと、などがあった。これは歌の職能者として、映像メディアに記録され今後将来的にも流通し続ける内容が、後世にとって価値の高いものであることを望むという先見性が重視されていた。

今後の課題をいくつか述べておくと、今回の研究ではかなり詳細な資料が収集されており、今後追加調査を踏

## 放送文化基金『報告書』平成24年度助成

まえて日本と中国において論文を発表していきたい。また、収集した約 180 作品の映像メディアの内容について、ある種の基準を設けて精査し、撮影対象や編集技術にどのような美的感性あるいは傾向性があるか、比較考察を通じてメディアリテラシーの特徴を明らかにすることも課題である。そして、徳宏タイ族地域で制作された映像メディアが隣国のビルマや、タイ北部に流通している状況を追跡調査し、異なる国における少数民族地域の映像メディアのローカル化を比較したい。

映像メディアは各少数民族地域のあいだで共通性を見せながらも独自のローカル化を遂げている。今後はさらにトランスナショナルな視野から、表舞台では注目されることのない、ローカル市場に流通する映像メディアの伝統民族文化コンテンツに着目し、中国雲南と東南アジア大陸部における人とモノ、そしてテクノロジーが織りなす文化のダイナミズムをミクロな美的感性に寄り添いながら明らかにしたい。



【写真 1 / 左】露店で販売されている VCD や DVD。ジャンルは、タイ族の即興歌の自主制作映像メディアや、ビルマのタイ族ポップスの海賊版などがある。VCD は 4~5 元、DVD は 8 元ほど。他の少数民族地域に比べて価格は安いようである。(1 元≒17 円)(雲南省西部、徳宏州 2014 年 2 月)

【写真 2 / 右】自分たちの踊りと歌を撮影してもらっているイ族の農民たち。撮影は販売目的ではなく、自分たちの娯楽と記念のためだという。撮影者が許可を得て市場で流通させることもある。また、この地域では、撮影の段階では自分たちは歌わず、編集時に有名な歌手の録音を挿入することもあるという。(雲南省中部、楚雄州大姚県 2013 年 7 月)



### 【写真 3】

路上で販売されている大音量スピーカー搭載 MP3 再生/録音機「小蜜蜂」。ここ数年、雲南省農村部にて老年層の娯楽として流行するようになった。種類によって映像も再生可能。USB メモリを用いてデータを移す。大きさは 15cm×10cm×4cm ほど。値段は 100 元から 1000 元。(雲南省中部、普洱市鎮沅県 2013 年 7 月)

## 参考文献

- 1) 岩渕功一 2003 「グローバル化のプリズムとしてのアジアメディア交通」『グローバルプリズム—＜アジア・ドリーム＞としての二本のテレビドラマ』岩渕功一(編)、pp. 7-38、東京：平凡社。
- 2) 丸川和雄 2007 『現代中国の産業—勃興する中国企業の強さと脆さ』東京：中央公論新社。
- 3) 伊藤悟 2010 「雲南の映像事情」『月刊みんぱく』33(2): 8-9。

## 連絡先

代表者: 伊藤悟 国立民族学博物館 外来研究員

住 所: 〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1

E-mail: satoru\_worldmusi[at]yahoo.co.jp (※メールの際は[at]を@に置き換えてください。)

(2014 年 6 月 27 日提出)